調査について

背景と目的

グローバル化やIT化など国際的に社会環境の変化が加速する中で、既存の知識を身につけるだけでなく、環境に柔軟に適応し、学び続け、課題を解決しようとする姿勢や力が必要と考えられるようになっています。そして、そのような姿勢や力を幼児期からはぐくむことの重要性が、世界的に注目されています。ベネッセ教育総合研究所では、この姿勢や力を《学びに向かう力(非認知的スキル)》として、年少期から毎年、国内で縦断調査を行ってきました。その中で、《学びに向かう力》の形成のプロセスと、《生活習慣》や《文字・数・思考(認知的スキル)》との相互影響の様子、保護者のかかわりの影響について明らかにしてきました(「幼児期から小学生の家庭教育調査」2012年から実施)。

この度、研究対象を国外に広げ、社会文化的に異なる環境に暮らす幼児の《学びに向かう力》《生活習慣》《文字・数・思考》の発達状況と保護者のかかわりを把握することを目的に、日本・中国・インドネシア・フィンランドの都市部で調査を行いました。幼児期の家庭教育の実態や、保護者の意識も合わせて調査し、背景となる環境や意識の違いや共通点を明らかにしました。

調査概要

調査対象	4歳～6歳(就学前)の幼児を持つ母親			
調査項目	子どもの基本的な生活時間／メディアとのかかわり／習い事／母親の教育観・子育て観／子どもの将来への期待／生活習慣・学びに向かう力(非認知的スキル)・文字・数・思考(認知的スキル)／母親の養育態度・行動／教育・しつけの情報源／子育ての担い手／父親・祖父母の家事・育児参加／子どもと過ごす時間など。			
調査国	日本	中国	インドネシア	フィンランド
調査地域	首都圏 (東京駅から40キロ圏内)	北京市・上海市・成都市	ジャカルタ市 他近郊4市	エスポー市 他3市
調査時期	2017年3月	2017年6月	2017年5～7月	2017年6～7月
調査方法	インターネット調査	幼児園通しの 自記式質問紙調査	調査員の戸別訪問による 聞き取り調査	保育園通しで配信された インターネット調査
有効回答数	1,086名	2,778名	900名	180名

※ サンプリングは有意抽出のため、厳密には、地域を代表するデータにはなっていないことに留意が必要である
※ 中国は、各都市の2等級～示範級の幼児園から対象園を選定した
※ インドネシアは、調査員が戸別訪問し、経済階級を把握するための質問をした上、ミドルクラス以上と判定された家庭に対して調査を実施した
※ フィンランドは、調査協力に同意した自治体の保育園を通して、通園する家庭に向けて調査協力依頼のメールを配信し、回答用URLから、保護者が回答した
※ 各国の小学校入学月の1～3ヶ月前に時期を合わせて調査を行った

データに関する留意点

- 図表・文中では、国名を記載していますが、調査は各国の都市圏で実施しており、調査国全体の平均値を示すものではないことにご留意ください。
- 中国、インドネシア、フィンランドは、地域性やサンプリングの影響で、世帯収入と母親の学歴が平均より高い傾向があります。
- 中国については、自記式質問紙調査のため「無答不明」が生じていますが、分析に当たっては、各国と同じ条件で比較するために、設問ごとに「無答不明」を欠損値として除外して算出しています。
- 本報告書で使用している百分比(%)は、各項目の算出方法に沿って出した値の小数点第2位を四捨五入して表示しています。その結果、数値の和が100にならない場合があります。
- (　)内はサンプル数を示しています。

各国の就学前の保育・教育の状況

日　本

日本の就学前機関には、幼稚園、保育所、認定こども園等がある。幼稚園は３歳から、保育所は０歳から、認定こども園は０歳からを対象にしている（ただし、園により異なる）。国が定める保育・幼児教育のガイドラインには、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領があり、2017年に改訂された。この改訂では、幼児期にはぐくみたい資質・能力として、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」が示されている。「学びに向かう力、人間性等」は非認知的スキルを含むものである。日本全国での就園率は、幼稚園（３～５歳児）41.4%、保育園（３～５歳児）49.3%である（2017年）。[1] ４月１日までに満６歳になった子どもは、その年の４月１日から小学校に入学する。

中　国

中国における就学前機関は、主として託児所、幼児園である。託児所は０歳～３歳未満の乳幼児を対象とする保育機関、幼児園は３歳～６歳未満を対象とする教育機関である。幼児園は、公立と私立があり、毎年、園の運営や教育状況の監査が行われ、示範級～３等級まで４階級に認定される。近年、幼児教育において、非認知的スキルの育成も重要視されるようになり、教育部では、2012年９月に「3歳～６歳児童の学習と発達ガイドライン」が出された。「2016年全国教育事業発展統計公報」（中国大陸）によると、就学前教育において、中国全土での粗就園率[2]は77.4%である（2016年）。[3] 小学校への入学は、９月１日からで、８月31日までに満６歳になっている子どもが入学対象となる。

インドネシア

インドネシアにおける就学前教育は、幼稚園（「普通幼稚園」と「イスラム教幼稚園」）またそれと同等とされる諸機関によるフォーマルな教育と、「プレイグループ」、「チャイルド・デイケア・センター」、またはそれと同等とされる諸機関によるノンフォーマルな教育がある。[4] 幼稚園は２学年制である。幼稚園のカリキュラムでは、発達段階に基づき、①道徳、宗教的価値、②社会性・感受性・自主性、③言語能力、④認識能力、⑤身体能力、⑥芸術性を成長させることが目指されている。非認知的スキルは、教育計画や評価基準の中に、融合的に取り入れられている。就園率（3歳～6歳）は68%である（2014年）[5]。
小学校への入学は、７月第３週からで、同年７月１日までに満６歳になっている子どもが入学対象となる。

フィンランド

フィンランドでは幼稚園と保育園のような区別はなく、施設の場合は主に保育園という枠組みになる。対象年齢は生後10か月から６歳であり、小学校入学の前の年の１月～ 12月の間に６歳になる子は「プリスクール（エシコウル）」と呼ばれる就学前教育（2015年８月より義務化され、週20時間で無料）に通う。2013年より、保育園は幼児教育として社会保健省から教育文化省の管轄へと移行し、2017年秋からは初めてナショナルカリキュラムが導入され、幼児教育の内容の充実と平均化が図られることとなった。2016年の統計によるとおよそ68%の１～６歳児が幼児教育を受けている[6]。小学校への入学は１月１日から12月31日までの間に満７歳になる子どもが対象で、８月に新学期が始まるため、まだ６歳の子とすでに７歳になっている子が混在してスタートする。

【引用文献・注】
1 文部科学省「学校基本調査」．厚生労働省「保育所等関連情報とりまとめ」
2 粗就園率とは、制度上の就園年齢（３歳～６歳未満児）人口と、幼児教育機関の全就園者（実態として親の選択でインフォーマルに就学を１年遅らせている児童、３歳未満児なども含みうる）との比率である。
3 中国教育部（教育省）．「2016 年全国教育事業発展統計公報」 http://www.moe.gov.cn/jyb_sjzl/sjzl_fztjgb/201707/t20170710_309042.html
4 服部美奈（2006）「第８章 インドネシア 道徳的価値と知識習得の調和を目指して」池田充裕・山田千明（編著）『アジアの就学前教育―幼児教育の制度・カリキュラム・実践―』明石書店
5 Kemendikbud (2015)『Rencana Strategis Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan 2015-2019』(https://luk.staff.ugm.ac.id/atur/RenstraKemdikbud2015-2019.pdf)
6 国立健康福祉研究所（THL）統計報告 29/2017 幼児教育 2016 年より http://www.julkari.fi/bitstream/handle/10024/135183/Tr29_17_vuositilasto.pdf?sequence=5

基本属性

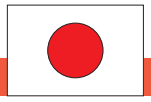
子どもの年齢・性別

(%)

	4歳	5歳	6歳
日本(1,086)	33.3	33.3	33.3
中国(2,778)	38.9	37.3	23.8
インドネシア(900)	33.3	33.3	33.3
フィンランド(180)	38.9	33.3	27.8

(%)

	男児	女児
日本(1,086)	53.5	46.5
中国(2,778)	52.9	47.1
インドネシア(900)	50.0	50.0
フィンランド(180)	50.0	50.0



日本

調査地域：首都圏（東京駅から40km圏内の市区町村）

母親

1．年齢：20代以下9.5%　30代65.2%　40代以上25.3%

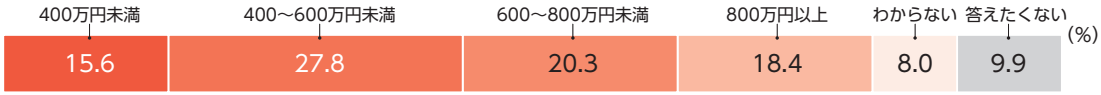
2．学歴：四年制大学卒以上39.9%

3．就業状況：有職34.3%（内、常勤（フルタイム）比率16.1%）、無職62.2%

世帯

4．配偶状況：有配偶95.6%

5．世帯収入（税込年収）



こども

6．就園状況

中国

調査地域：上海市（34.1%）・北京市（39.5%）・成都市（26.3%）

母親

1．年齢：20代以下4.6%　30代83.0%　40代以上12.4%

※母親の年齢は無答不明が23.3%あるが、集計から除外している。

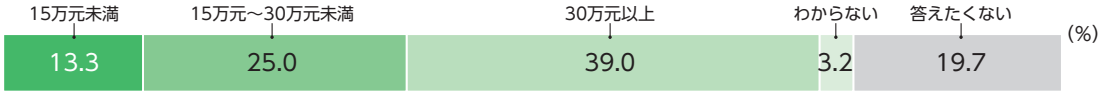
2．学歴：四年制大学卒以上74.3%

3．就業状況：有職90.0%（内、常勤（フルタイム）比率70.3%）、無職6.9%

世帯

4．配偶状況：有配偶98.8%

5．世帯収入（税込年収）



こども

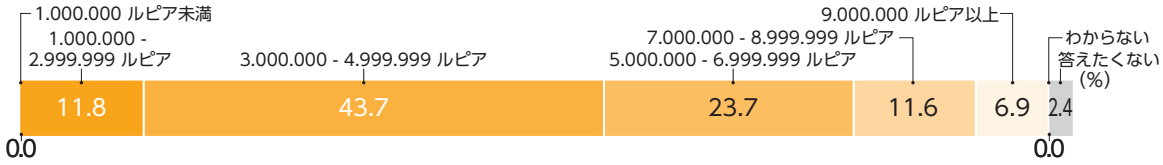
6．就園状況　幼児園　100%　※幼児園通しの調査のため。

インドネシア

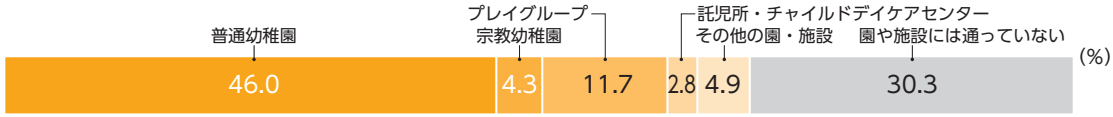
調査地域：Jakarta（42.3%）・Tangerang（14.6%）・Depok（15.1%）・Bekasi（13.8%）・Bogor（14.3%）

母親
1. 年齢：20代以下28.7%　30代57.2%　40代以上14.1%
2. 学歴：四年制大学卒以上6.3%
3. 就業状況：有職19.2%（内、常勤（フルタイム）比率5.9%）、無職78.7%

世帯
4. 配偶状況：有配偶97.7%
5. 世帯収入（税込月収）



こども
6. 就園状況



フィンランド

調査地域：Espoo（51.1%）・Kouvola（24.4%）・Seinäjoki（14.4%）・Lappeenranta（10.0%）

母親
1. 年齢：20代以下7.2%　30代68.3%　40代以上24.5%
2. 学歴：四年制大学卒レベル以上71.1%
3. 就業状況：有職84.5%（内、常勤（フルタイム）比率75.0%）、無職5.6%

世帯
4. 配偶状況：有配偶88.3%
5. 世帯収入（税込年収）

こども
6. 就園状況

各国の子どもの生活・母親の子育て意識サマリー

日本（首都圏）

●子どもの生活：

平日は７時頃に起床する子どもが４割台、21時頃に就寝する子どもが３割強でもっとも多い。園で過ごす時間は、幼稚園児が多いデータのため全体では「５時間ぐらい」が約４割であるが、幼稚園児と保育園児で、在園時間は異なり、幼稚園児は「５時間ぐらい」、保育園児は「８～９時間ぐらい」が多い。絵本、テレビ、ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダーの普及はいずれもほぼ100％で、「週に３日以上」使用している比率が５割以上。７割弱が習い事をしており、スイミング、体操などのスポーツ系の習い事が上位２位である。

●母親の子育て意識：

子育てにおいては、自立、生活習慣、協調性、自己主張を重視している。子どもの進学期待は、四年制大学卒業までがもっとも多い。子どもの将来には、「自分の考えをしっかりもつ人」「他人に迷惑をかけない人」と願う比率が、他国に比べて高い。母親にとっての子どもの存在は、「生活や人生を豊かにしてくれる存在」が66.6％でもっとも高い。「配偶者・パートナーとの関係をつないでくれる存在」の選択率が他国に比べて高く、「将来の社会を担う存在」の選択率が他国に比べて低いことが特徴である。子育てと自分の生き方のどちらを重視するか、という二択の問いについては、他国に比べて、顕著に差がつかず、二極に分かれた。

インドネシア（ジャカルタ他）

●子どもの生活：

起床は、４か国の中でもっとも早く、４割強が６時頃までに起床する。南国であるため、気温の低い午前中の時間帯に行動することが多いことや、イスラム教の場合は早朝に礼拝があることなどで、子どもの起床が早くなっていると考えられる。幼稚園の教育課程は午前中で終わるので、在園時間は短く、４時間未満が約９割を占める。４か国の中で、絵本や知育玩具の普及率がもっとも低く、絵本は２割、知育玩具は約５割が家にない。絵本の使用頻度は、４か国のなかでもっとも低く、週３日以上使用する比率は全体の２割強（他国は５割～７割）。一方、スマートフォンの使用頻度は、４か国の中でもっとも高く、週３日以上が６割強（他国は１割～２割）。習い事をする比率は４割強で、４か国の中ではもっとも低い。「コーランの読み書き」は４割弱が習っている。

●母親の子育て意識：

子どもに対する期待は「自分の家族を大切にする人」（75.8％）、「リーダーシップのある人」（53.1％）と願う比率が高い。子どもの存在は、「先祖や家を受け継いでくれる存在」（64.3％）、「将来、自分の面倒をみてくれる存在」（57.9％）が高く、家族意識・家系継承意識が他国に比べて顕著に高い。子どもの進学期待が高く、約９割の母親は子どもに大学または大学院までの進学を希望している。子育てと自分の生き方のどちらを重視するかでは、「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」（翻訳上では、「自分のことよりも子どもを優先する」という、より柔らかいニュアンスで訳された）を９割強が選んでいる。

中国（上海・北京・成都）

●子どもの生活：

４か国の中では、中国の子どもがもっとも遅寝、遅起きの傾向がみられる（平均で７時12分頃起床、21時41分頃就寝）。子どもが習い事に通う比率が９割と４か国の中でもっとも高く、習い事の内容も、スポーツ系、芸術系、学習系と多様である。もっとも多いのが「英会話などの語学の教室」で５割強が通っている。

●母親の子育て意識：

子どもの存在は、「自分とは独立した人格をもつ存在」が81.4％でもっとも高い。子育てにおいて、「外国語を学ぶこと」「芸術的な才能を伸ばすこと」「自然とたくさんふれあうこと」を他国と比べてより重視している傾向がある。子どもの進学期待が４か国のなかでもっとも高く、６割が「大学院卒」を期待している。子育てと自分の生き方のどちらを重視するかでは、８割弱が「子育ても大事だが、自分の生き方を大切にしたい」と回答しているが、一方、「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいたほうがいい」を８割強が選択、アンビバレントな思いがうかがわれる。

フィンランド（エスポー他）

●子どもの生活：

平日は、４割強が７時頃に起床し、保育園で８時間程度過ごし、20時～21時ごろに就寝する子どもが平均的である。フィンランドでは、平日と休日で生活時間はあまり変わらない（フィンランド調査監修者より）。絵本や図鑑、知育玩具は、９割以上の家庭に普及している。絵本とタブレット端末について、「週３日以上」使用する比率は、それぞれ77.2％、46.6％で、４か国の中でもっとも高い。中国についで、習い事をしている比率が高く、８割弱。スイミング、サッカー、音楽教室などのスポーツ系・芸術系の習い事が多い。

●母親の子育て意識：

子育てでは、「他者への思いやりをもつこと」「社会のルールやマナーを身につけること」を重視している。子どもには、将来、「自分の家族を大切にする人」になってほしいと８割強が回答している。子どもの存在は、ほぼ全員が「生活や人生を豊かにしてくれる存在」と回答している。ついで、「自分とは独立した人格をもつ存在」（66.7％）ととらえている。子育てと自分の生き方のどちらを重視するかを問う設問では「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」「母親がいつも一緒でなくても、愛をもって育てればよい」を８割強が選択している。